人文・社会科学科目群

哲学・思想分野

哲学・思想分野科目は、この分野に属する学問諸領域の基盤となる内容を紹介する「基礎」科目と、より専門的で限定された範囲の授業を講義形式で展開する「各論」の講義科目、および教員との双方向的なやりとりの可能な少人数でテキストの講読や研究発表などを行うゼミナール形式の科目（具体的には「〇〇基礎ゼミナール」、「ILAS セミナー」）の三種類に分かれています。

〇　「基礎」科目は必ずしも当の学問全体の紹介や体系的な紹介とはかぎりません。「基礎」は初歩的であるということを意味するのではなく、当の学問の基礎・土台となるような根源的な内容を紹介し、その基本的精神を理解してもらうことを目標としています。ただし、まったくその学問の知識をもたない人でも十分理解できるように配慮されています。

〇　ゼミナール形式の科目は原則的に「基礎」科目と対応していて（たとえば基礎科目「哲学」（Ⅰ・Ⅱ）」に対してゼミナール形式の科目「ILAS セミナー：哲学」（前期）、「哲学基礎ゼミナール」（後期）があります）、多くは「基礎」の担当者が担当しています。この授業を履修することで「基礎」科目の内容をさらに深く、教員の個人的な薫陶をうけながら学んでいけるようになっています。ただ、関連する「基礎」を履修していなくても理解できるように配慮されています。

〇　「各論」の講義科目は「基礎」の内容を深めていく形をとっていて、「基礎」担当者が担当しているものも多くあります。「基礎」科目を履修して興味を抱いた学生の皆さんは、ぜひ履修してください。一部の科目については、関係する「基礎」を履修していることが履修要件になっているうえに、2 回生以上指定の科目もあるので注意してください。

歴史・文明分野

①　日本史関係科目の分類

日本史関係科目は、日本の歴史理解に関する基礎的な内容を取り上げる「日本史Ⅰ・Ⅱ」と、より限定されたテーマを取り上げる「日本史各論」、および少人数で講読・研究発表などを行う「基礎ゼミナール」（前期は ILAS セミナー）で構成されています。

「日本史Ⅰ・Ⅱ」は、大局的な視点から日本の歴史を概観するものです。担当者の専門によって、取り上げる時代・テーマが異なっていますので、内容についてはシラバスで確認してください。「基礎ゼミナール」（前期は ILAS セミナー）も、研究入門的な性格の科

目です。これらの科目は、理系学生や、高校段階で日本史を履修していない受講者にも配慮する内容となっています。

「日本史各論」は、テーマがやや絞られており、なかには専門性の高い内容もあります。しかし、その分、日本史の研究における分析手法や考え方を、直接的に学ぶことのできるものとなっています。内容についてはシラバスで確認してください。

② 東洋史関係科目の分類

東洋史関係科目は、「基礎」科目の「東洋史Ⅰ・Ⅱ」（それぞれ前・後期開講）と「各論」科目の「東洋史基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」に分かれます。基礎科目の「東洋史」は、おおむね「古代～中世史」、「近世史」「近代～現代史」に分けて開講されます。詳細については、シラバスを参照していただきたく思いますが、高校段階で世界史を履修していない人にも配慮した内容となっていますので、各人の興味と関心に応じて積極的に履修してください。

各論の「東洋史基礎ゼミナール」（後期開講）は、少人数授業の形式を取ります。テーマが多少絞られていたり、若干専門性が高かったりすることもあるでしょうが、世界史の教科書とかけ離れた内容ではありませんので、果敢に挑戦していただきたく思います。少人数で行う文献講読やゼミ形式の授業では、受講者の主体的な授業参加が求められます。その分、厳しい要求をされることもあるでしょうが、それは必ずや皆さんの成長の糧となるはずです。

なお、後期開講の「東洋史基礎ゼミナール」は、前期開講の ILAS セミナー「中国史の基礎資料」および「東洋史入門」で学んだことを基礎とし、それを発展させた内容を含んでいます。両者を連続して受講することで、より充実した学習を期待することができるでしょう。

③ 西洋史関係科目の分類

西洋史関係科目は、ヨーロッパ社会の歴史理解に関する基礎的な内容を取り上げる「西洋史Ⅰ・Ⅱ」と、少人数で講読・プレゼンテーションを行う「基礎ゼミナール」（前期は ILAS セミナー）で構成されています。

「西洋史Ⅰ・Ⅱ」は、原則として、ヨーロッパの固有の文明と文化の起源や成立や発展に幅広くかかわるものですが、担当者の専門によって重点を置くテーマ、地域、時代が異なりますので、内容についてはシラバスで確認してください。また、これらの科目は、理系学生や、高校段階で世界史を履修していない人にも理解してもらえるように配慮します。

基礎ゼミナールは、おおむね時代や地域・国家を特定しており、中には専門性の高い内容もありますが、西洋史Ⅰ・Ⅱと同様に、西洋史学の基礎的な学びが身に着くよう初学者にも十分に配慮しています。その内容についてはシラバスで確認してください。

④　現代文明論科目の分類

現代文明論科目は、現代文明の課題を思想史の観点から明らかにする「現代文明Ⅰ」と、現代社会に特有の構造・現象をとりあげる「現代文明Ⅱ」で構成されています。狭義の歴史学に収まらない分野横断的な視点から近代国家、ナショナリズム、資本主義の複合的な関係を探る科目ですが、講義は予備知識のない学生にも理解できるよう配慮しています。

芸術・文学・言語分野

①　芸術関係科目の分類

芸術関連科目では、主に西洋と東洋と日本の美術や音楽について、理解を深め、感性を磨くことを目指します。さらに、「美」とは何か、「芸術」とは何か、「創造性」とは何か、といった根本的なテーマについて受講生とともに考えていく科目構成になっています。

「基礎」は、「芸術学Ⅰ・Ⅱ」、「音楽芸術論Ⅰ・Ⅱ」、「東洋美術史Ⅰ・Ⅱ」からなります。「芸術学」では、古代から現代までの具体的な芸術作品や美学思想を分かりやすく解説しながら、アートに親しんで感性を磨いていく内容になっています。「音楽芸術論Ⅰ・Ⅱ」では、作品鑑賞等を通じて音楽の歴史と魅力に迫り、「東洋美術史Ⅰ・Ⅱ」ではインドや中国等の仏教美術の原点に触れます。いずれも理科系の学生にもぜひ受講してほしい内容です。

「各論」は、「創造行為総論 A・B」、「近代芸術論 A・B（隔年開講）」、「創造ルネッサンス論 A・B」からなります。「創造行為総論 A・B」では、芸術と社会の関係をさまざまな観点から考察するほか、芸術や美について著わされた優れた著作を取り上げ、偉大な美の思索家たちの思想に触れます。「近代芸術論 A・B（隔年開講）」は明治期の芸術を同時代の社会的背景を踏まえて俯瞰し、「創造ルネッサンス論 A・B」ではルネサンスおよびバロック時代に制作された芸術作品を主に取り上げて表現や技法の特徴を分析し、さらには保存や展示、修復をめぐる問題についても考えます。

「基礎ゼミナール」の「創造ルネッサンス論基礎ゼミナール」では、少人数のゼミ形式で行います。美術作品をただ「見る」ことからステップアップして、注意深く対象を観察し解釈する術を身につけ、情報を言語化する「作品記述（ディスクリプション）」の方法論を学びます。「創造行為論講読演習」では、美学や芸術学の基本文献を外国語で読み込む力を養います。

②　国語国文学関係科目の分類

国語国文学関係科目には、基礎的な内容を中心として、幅広く古典文学を取り上げる「国語国文学」Ⅰ・Ⅱ、同じく近代文学を取り上げる「日本近代文学」Ⅰ・Ⅱ、中国古典文学を取り上げる「漢文学」Ⅰ・Ⅱ、日本語を取り上げる「言学」Ⅰ・Ⅱがあります。「国語国文学」「日本近代文学」は、『万葉集』『古事記』など上代文学の始まりから平安時代

の和歌や物語、中世の説話、近世の俳諧、さらには明治・大正・昭和期の文学について、日本語学の知見とも関連させながら入門的講義を行っています。また、日本の文化と日本語に大きな影響を及ぼした中国古典文学をカバーする「漢文学」は、高等学校で用いられたなじみある教材を用いた入門的講義で、より深い理解を獲得することを目指しています。「言学」は、日本古典文学の知見を踏まえた、日本語に関する入門的講義です。いずれも、理系学生にも配慮した内容となっています。

より限定されたテーマを取り上げる「各論」科目には、日本や中国の専門書・古典を読む「日本語学文献講読論」Ⅰ・Ⅱや「日本古典講読論」Ⅰ・Ⅱ（いずれも 2 回生以上向け）などがあります。中には専門性の高い授業もありますので、その内容・履修条件についてはシラバスで確認してください。

後期開講の「日本近代文学基礎ゼミナール」は、前期開講の ILAS セミナー「日本近代文学」ともども、少人数で講読や研究発表を行うゼミ形式の授業であり、受講者には主体的な授業参加が求められます。

③　言語関係科目の分類

言語関係科目は、言語を人間の思考とコミュニケーションの主要なツールと考え、思考とコミュニケーションのプロセスとメカニズムを解明し人間性の理解に迫ることを目標に、次のように体系化されています。

「言語科学Ⅰ」・「言語科学Ⅱ」では、入門的な内容ながら、音韻論・形態論・統語論・意味論・語用論・異文化間コミュニケーションおよび言語教育への応用といった、言語学の主要分野を網羅的に扱います。これらに続くものとして、2 回生以上向けの「言語構造機能論」・「言語比較論Ⅰ」・「言語比較論Ⅱ」・「言語認知論」・「少数言語論」が提供されています。いずれも、ことばに関する知的関心に沿った、わかりやすい授業内容ですが、自身の興味に応じた中身かどうかはシラバスで十分に確認してください。担当教員と事前に（あるいは初回の授業時に）相談してもらうことが望まれます。

教育・心理・社会分野

①　教育学関係科目の分類

教育学関係科目は、基礎的な内容を中心とする「基礎」としての「教育学Ⅰ・教育学Ⅱ」と、より応用的なテーマを取り上げる講義科目や、少人数で講読・研究発表などを行う基礎ゼミナール（「教育学基礎ゼミナール」と「ジェンダー論基礎ゼミナール」）からなる「各論」で構成されています。

「教育学Ⅰ」は、長い射程で教育そのものを論じながら、教育を見る眼を鍛えていくことをめざしており、「教育学Ⅱ」は、現代教育が抱えている国内・外の諸課題の把握・理解をめざすものです。「教育学Ⅰ・教育学Ⅱ」を担当している教員は、教育社会学・教育

史・教育哲学を専攻しており、それぞれの学問の方法論にのっとって教育という事象を考察しています。学問的な方法論の違いによって授業内容は大きく異なりますので、詳細はシラバスで十分確認してください。教育は学生のみなさんにとって身近なテーマであると思われますが、教育現象を学問の対象とすることの意義とそのために不可欠な理論や方法への理解を深めることが、教育学のめざすところです。

「各論」の講義科目は、テーマがやや絞られており、専門性の高い授業もありますが、興味をもった科目については、内容をシラバスで確認した上で、積極的に受講してください。また、「基礎」や「各論」には英語講義も複数存在していますので、これらの受講にも果敢に挑戦してください。

基礎ゼミナールは、教員と学生との間での双方向的なやりとりが可能な少人数で行うもので、受講者には主体的な授業参加が求められます。ゼミ形式で報告と討論を行い、そのことを通して、教育学やジェンダー論のより深い理解ならびに問題意識の醸成をめざしています。なお、基礎ゼミナールは後期に開講されていますが、前期には教育学関係のILAS セミナーとして「教育・社会・国家」「ジェンダー論」が開講されています。ゼミ形式の授業に興味がある人は、基礎ゼミナールだけでなく、これらの ILAS セミナーを履修することも推奨します。

② 心理学関係科目の分類

心理学関係科目は、心理学に関連する幅広いトピックの中から、心理学を学んだことのない学生にも興味・関心が持てるようなものを選び、入門的に概説する「基礎」科目、心理学の各分野別に体系的に基礎的内容を解説していく講義と、演習形式でしか身に付けることのできない心理学的思考法・方法論等を学ぶ基礎ゼミナールからなる「各論」科目、および ILAS セミナーという「少人数」科目の 3 種類からなります。

「基礎」科目では、心理学という学問分野の幅広い問題領域（ないしは応用領域）に触れてもらうとともに、心理学の基本的な考え方を理解してもらうことを目標としています。心理学は、生物としてのヒトを対象とする心理学と、人生を生きる人間を対象とする心理学に大別することができますが、心理学Ⅰは前者に、心理学Ⅱは後者に、大まかに対応しています。

「各論」科目は、講義と基礎ゼミナールからなっています。講義は、講義担当者が専門としている分野に関する基礎的な内容を扱う講義であり、その分野の基礎的な知見から最先端の研究動向までを見据え、その分野の一通りの体系に触れてもらうことを目標としています。基礎ゼミナールでは、演習形式で、心理学の各分野の研究法を学んだり、心理学的思考法を応用して関連する諸現象を分析したり、文献講読を通じて最先端の知見を学んだりすることができます。各担当者の開講する講義と基礎ゼミナールは基本的に対応していますが、それぞれ独立して履修することができるように配慮されています。

「少人数」科目は、ILAS セミナーであり、基礎ゼミナールと同様、少人数の演習形式

で心理学の各分野の入門的内容を実践的に学ぶことができます。

心理学は、対象に関しても、方法論や研究スタンスに関しても、きわめて幅広い分野です。授業の詳細をシラバスで確認の上、ぜひ多様な「心理学」を履修してください。

精神分析学・精神病理学関係の科目のうち、精神分析学関係の科目は、歴史的展開を踏まえて精神分析の基礎的な考え方を学ぶ「精神分析学」と、精神分析の考え方を応用しながら芸術や集団心理を理解する「精神分析Ⅰ・Ⅱ」、また、研究的接近のとば口となる「精神病理学・精神分析学講読演習」とから成ります。

また、精神病理学関係の科目は、精神疾患からの社会復帰の課題を考える「行動病理学Ⅰ・Ⅱ」、研究的接近を講読によって試みる上記の「精神病理学・精神分析学講読演習」とから成ります。このうち「行動病理学Ⅰ・Ⅱ」では、複数部局と非常勤講師の協力のもとに、共生の理念のもとで、現在の精神障害者福祉の在り方に触れます。

精神病理学と精神分析学は、独立した人間理解の体系を成すと同時に、臨床活動において密接な協力関係があり、それゆえ一つの科目群として履修してもらうこととなっています。特に、講読を通じてテーマを見つけてゆくための「精神病理学・精神分析学講読演習」は、単一の講読科目に総合されています。

③　社会学関係科目の分類

社会学関係科目は、基礎的な内容を中心とする「社会学」（Ⅰ、Ⅱ）、より応用的なテーマを取り上げる「社会学各論」（Ⅰ、Ⅱ）、および少人数で論文の講読・紹介発表などを行う「ILAS セミナー：社会学」（Ⅰ、Ⅱ）、「社会学基礎ゼミナール」（Ⅰ、Ⅱ）で構成されています（「ILAS セミナー：社会学」は少人数教育科目群に属します）。

「社会学」は、社会学理論の基本的な概念と学説を紹介する「社会学Ⅰ」（前期開講、計 3 コマ）と、それらの基本概念・学説に基づく社会学の経験的研究を幅広く紹介する「社会学Ⅱ」（後期開講、計 5 コマ）から成ります。いずれも、大学で初めて学ぶ社会学という学問の基本的な視点や思考方法の意義、またそれによって現代社会の現実をどのように社会学独自の観点から捉えることができるかということを、理系学生も含めた初学者に体得してもらうことを目標としており、（高校の公民科などの）特別な予備知識は必要としません。

「社会学各論」は、「社会学各論Ⅰ」（1 コマ）が前期に、「社会学各論Ⅱ」（1 コマ）が後期に、それぞれ開講されます。これらは、「社会学Ⅰ・Ⅱ」の応用として、領域をより限定した社会学の専門的研究を、やや深く掘り下げて紹介します。具体的な内容は年度によって変化しますので、内容および履修条件についてはシラバスで確認してください。

少人数科目は、「ILAS セミナー：社会学Ⅰ」（1 コマ）が前期に、「社会学基礎ゼミナールⅠ」「社会学基礎ゼミナールⅡ」（各 1 コマ）が後期に、それぞれ開講されます。いずれも少人数で論文の講読や紹介発表を行うゼミ形式の授業であり、受講者には主体的な授業参加が求められます。扱う論文等は年度によって変化しますので、内容についてはシラ

バスで確認してください。ただし、いずれも社会学の初学者を対象としており、特別な予備知識を必要としない点は、「社会学Ⅰ・Ⅱ」と同様です。

※「日本観照：多文化環境で学ぶ現代日本社会の諸相」 は、人文・社会科学科目群日本理解分野「Current Issues in Japan I」との合同授業として実施されます。

地域・文化分野

① 人類学関係科目の分類

人類学関係科目は、文化人類学および下位分野の一般的な内容を講義する基礎論（文化人類学Ⅰ・Ⅱ、生態人類学Ⅰ・Ⅱ等）、より限定的な内容を講義する各論（文化人類学各論Ⅰ・Ⅱ、宗教人類学等）の講義科目、少人数で講読や発表を行う調査演習・ゼミナールで構成されています。

講義科目の基礎論・各論ともに、世界各地の多様な環境のもとにある人間の生活を主題としており、知的興味さえあれば文系・理系を問わず、初学者でも受講可能な授業内容となっています。講義で扱う内容は、担当教員の専門により多彩です。そのため、受講希望者は、自身の学習目標を主体的に設定し、シラバスで講義内容を十分に確認した上で、複数の講義科目を選択して履修することが望まれます。

演習・ゼミナールは、講義科目履修者または既修者の受講が望まれます（必須ではありません）。ILAS セミナー（文化人類学調査法・社会人類学調査法）および調査演習は、人類学的研究に必須の調査方法であるフィールドワークの基本を学ぶ少人数科目であり、文献講読のほか、調査計画立案、参与観察による資料収集、資料分析と提示の方法を実践的に習得することを目指します。地域研究概論では、人類学的な視座からアジアやアフリカ地域に関する理解を深めます。

② 地理学関係科目の分類

地理学関係科目は、基礎論としての「人文地理学」、「地域地理学」、「自然地理学」と、都市・村落・歴史地理・地理情報・経済地理あるいは日本・欧米・アジア・アフリカに関して踏み込んで考える各論、そして少人数で行う基礎ゼミナールからなります。これに地理学関係教員が担当する ILAS セミナーが加わります。

高校までの地理教育は、世界の諸地域について事項を学ぶ科目としてとらえられがちですが、大学で学ぶ地理学科目は、世界諸地域の多様性を重視しつつ、環境と地域文化との関連や文化間の相互作用の考察を通して地域の成り立ちを明らかにするものです。基礎論・各論それぞれ対象や方法は幅広く多様ですが、特色として「地図を読む」、「地図で描く」ことを通した空間的なものの見方の重視をあげることができるでしょう。

基礎ゼミナール科目は、地図の読解・作成や地理情報の利用などの実習を含むものです。

ILAS セミナーでは、主に文献講読や受講者各自の研究発表を行います。

③　環境構成論関係科目の分類

環境構成論関係科目は、建築および建築によって構成される環境（都市・集落）を扱う科目群です。とりわけ建築と環境の歴史と現代における計画をテーマとしています。世界遺産登録に象徴されるように、わが国の歴史的環境や資源の保全と活用への期待は、今後ますます高まっていくことが予想されます。そうした動きは現在、遺産学という大きな枠組みで世界レベルの議論へと拡大すると同時に、われわれの身近なまちづくりにおいても必須の要件として認知されるに至っています。また、近年多発する地震や大雨といった災害後の復旧・復興における住宅や集落、コミュニティの再建・再生は、その理論的な検討と実践が、重要な社会課題となっています。環境構成論科目は、その基礎的事項を講じると同時に、最前線の状況を紹介するものです。「都市空間論」が基盤となる内容を扱う基礎論、「都市空間論各論Ⅰ・Ⅱ」などが個別のテーマを取り上げる各論、「都市空間論基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」が少人数で講読・研究発表・見学会などを行うゼミ形式の科目となっています。担当教員の専門によって、取り上げる建物や地域、また研究の視点や方法論等が異なるため、各科目の内容はシラバスで確認してください。

特に必要となる予備知識はなく、理系・文系を問わず履修することが出来る内容となっています。また、各科目は、それぞれ独立した内容となっており、単独での履修も問題はありません。もちろん、当該分野の幅広い知識を得、かつ理解を深めるためには、連続して履修する、あるいは複数の教員の科目を履修することが望まれます。さらに体系的に学びたい学生は、建築系の科目や環境系の科目と併せて履修することをお勧めします。

法・政治・経済分野

①　法学関係科目の分類

全学共通科目の法学系科目は、広く法学全体の導入・案内をおこなう基礎的・入門的科目（「基礎」）、いくぶん主題や方法を限定して発展的・専門的内容をあつかう科目や少人数での講読・プレゼンテーションを中心にすすめられる基礎ゼミナール（「各論」）の二種類から構成されています。またこれと合わせ、基礎ゼミナール同様少人数でのきめ細かな指導をめざす ILAS セミナーも提供します。

ILAS セミナーは、前期のみの開講です。現代・過去の法律問題、あるいは社会的・経済的・政治的問題にも広く題材を求めつつ、大学での学習全般への手引き（文献資料の探し方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方など）を提供します。人文・社会科学系科目の基本的な学習技術を身につけ、この分野への関心を喚起・発展させる機会として活用してください。

基礎科目・各論科目はいずれも、専門課程において法学を専攻する予定の受講者（法学

部生）にとってはその後の法学学習の導入・基礎固めとしての役割を果たすいっぽうで、それ以外の受講者にとっては社会生活上求められる法律に関する基本的な知識と考え方を示すとともに、他の学習分野・学問領域との関連について広い視野を得る機会を提供します。法学それ自体はたくさんの細分化された専門領域からなる広大な学問領域であり、全学共通科目のなかでその全貌を紹介することは不可能ですが、そこに通底する共通の発想や関心のあり方に触れていただき、今後の学習と生活に役立てていただきたいと考えています。

基礎科目は、主として法学についての特別な基礎知識をもたない初学者を前提に、法学学習者に求められる最も基礎的な知識・技術を提供し、特有の発想に親しんでもらうことをめざします。憲法、民法、刑法や民事・刑事訴訟法、行政法、労働法等々個別の法領域だけでなく、六法や判例をはじめとする法情報へのアクセス方法、専門用語に関する基礎的な理解、条文解釈の方法等を提示して、法律・法律学への広くバランスのとれた見方を身につけてもらいたいと考えています。

各論科目は、各担当教員の専攻する研究領域に近い内容に特化することで、皆さんの関心に応じた受講が可能になっています（とはいえ、特別な予備知識がなくても受講できるように配慮がなされています）。個々の講義内容は担当教員や開講年次等によって異なるので、くわしくはシラバスで確認してください。

なお、科目・担当教員によっては、指定教科書や参考図書のほかに、六法（『ポケット六法』等のハンディ版）や用語辞典、法令用語の概説書等の携行・参照が求められる場合があります。

一般に法律の世界、法学という学問に対しては、杓子定規で堅苦しいというイメージがつきまといがちですが、実際には、きわめて幅の広い想像力と柔軟な創造力を求められる領域でもあります。法学特有のものの見方・考え方に触れることを通じて、皆さんの視野と関心を広げていく一助としてください。

②　政治学関係科目の分類

政治学系科目は、日本をはじめとする先進国における政治の実態や歴史、あるいは、発展途上国を含めた政治的発展の歴史と理論、さらには国際政治の実態や歴史について学びながら、政治学に関する基本的な概念や理論を理解し、それにもとづいて現実の政治現象を解釈・分析できるようになることを目指しています。

「基礎論」は、「政治学Ⅰ」および「政治学Ⅱ」などからなります。これらの講義では、政治学における基本概念（民主主義、権力、政治体制など）やその歴史について説明するとともに、これまで展開されてきた政治学の理論にもとづく政治現象の分析を紹介します。

「各論」は、「国際政治論Ⅰ」、「国際政治論Ⅱ」、「公共政策論Ⅰ」、「公共政策論Ⅱ」、「歴史の中の政治と人間」、「現代政治分析への招待」などからなっており、基礎論にくらべて、

より専門性の高いテーマを扱っていますが、特別な予備知識がなくとも履修できるように配慮がなされています。具体的には、国際政治や行政、政治思想などについて講ずるものや、政治現象を分析するためのさまざまなモデルや手法の紹介がなされるものがあります。

「基礎ゼミナール」では、主としてゼミ形式で、基礎的文献の講読や各自の研究報告などをおこなうこととなっています。特別な予備知識などは必要ありませんが、受講者の積極的な参加が望まれます。なお、基礎ゼミナールは後期に開講されますが、前期には政治学関係の ILAS セミナーとして「公共政策論Ⅰ」「国際政治論」が開講されています。ゼミ形式の授業に興味がある人は、基礎ゼミナールだけでなく、これらの ILAS セミナーの履修も推奨します。

③　経済学関係科目の分類

経済学関係科目は、基礎的な内容を中心とする基礎科目、より限定されたテーマを取り扱う各論科目、および少人数で講読・研究発表などを行なう基礎ゼミナールで構成されています。

基礎科目は、「経済学Ⅰ」において、そもそも経済とは何かという視点から、幅広く経済を見る目を鍛えることを目指します。また「経済学Ⅱ」においては、現代経済の諸問題をどう考えるかという視点から、諸課題の把握・理解を目指します。それぞれ、経済思想史、マルクス経済学、ミクロ経済学、マクロ経済学という 4 つの観点から、「経済学Ⅰ」において長い射程で経済そのものを論じ、「経済学Ⅱ」においてより現代的な諸課題について考えます。「経済学Ⅰ・Ⅱ」はいずれも「基礎論」的性格をもちますが、ここで「基礎」とは、必ずしも初学者のための「初歩」、あるいは経済学部におけるカリキュラムの「初級」を意味しません。予備知識を必ずしも必要としませんが、経済学の基礎となる思考法を理解してもらうことを目標とします。なお歴史・文明分野の基礎科目「現代文明Ⅰ・Ⅱ」も、狭義の歴史学に収まらない分野横断的な視点から経済文明の原理を探るものであり、併せて履修することが望まれます。

各論科目は、「社会経済システム論Ⅰ・Ⅱ」、「現代経済社会論Ⅰ・Ⅱ」、「公共政策論Ⅰ・Ⅱ」などがあり、政治・社会など隣接諸分野との関連（インターフェイス）、現代との関連（フロンティア）をより強く意識した講義を提供します。

基礎ゼミナールは、少人数で講読や研究発表を行なうゼミ形式の授業であり、全学部・全学年にわたる学生が一堂に会して議論できる稀有な空間です。受講者には主体的な参加が望まれます。前期の ILAS セミナーを履修した学生が後期に本ゼミナールを続けて履修することで、より学修が深められるよう工夫されており、ILAS セミナーと組み合わせた系統的履修が望まれます。

日本理解分野

日本理解分野は、留学生を対象としたもので、日本に対する関心を広げ、理解を深めることを目的としています。学部生の留学生に向けては Culture and Traditions in Japan Ⅰ、Culture and Traditions in Japan Ⅱ（2 クラス開講）、Current Issues in Japan Ⅰ、Current Issues in Japan Ⅱの 4 科目が提供され、人文科学や社会科学の視点から、日本の文化、社会の特徴について概観できるよう構成されています。また、多様な文化的背景を持つ受講生が想定されることから、日本、自国、他国の文化や社会状況の比較を通して、それぞれについての理解を深めることも目指します。講義は英語で行われ、KUINEP 学生の推奨科目となっています。

留学生を対象とした科目ですが、一部科目では、留学生以外であっても、日本の文化、社会について留学生と共に学ぶ意欲のある本学学生の聴講（単位付与は行われない）を認めています。詳しくは各科目のシラバスを確認の上、担当教員に相談してください。日本人学生については KULASIS での登録を認めていませんので、ご注意ください。

Culture and Traditions in Japan Ⅰ（前期）では、「一期一会」、「以心伝心」などのキーワードを手がかりに、言葉を通して日本文化の特徴を探っていきます。Culture and Traditions in Japan Ⅱ（後期・湯川 志貴子 担当）では、年中行事、信仰、婚姻、教育などの日本文化の様々な側面を取り上げ、文化や伝統の特徴、その歴史的変遷を考察します。同じく Culture and Traditions in Japan Ⅱ（後期・阿久澤 弘陽 担当）では、第二次世界大戦、差別、経済・政治問題、ポップカルチャーなどのトピックを通して日本近現代史を概観します。Current Issues in Japan Ⅰ、Ⅱは共に社会科学的視点から、Current Issues in Japan Ⅰ（前期）は家庭、学校、職場、スポーツ、コミュニケーション、Current Issues in Japan Ⅱ（後期）は少子・高齢化などの人口問題、女性の社会進出やジェンダー意識、格差社会などの題材を選定し、日本社会の特徴について学びます。以上の 4 科目は、日本に関する知識が十分でない人でも理解できるよう配慮されています。また、複数の科目を受講することで、より幅広い内容を網羅し、効果的な学習が期待できるようになっています。

※Current Issues in Japan Ⅰ（前期）については、人文・社会科学科目群教育・心理・社会分野「日本観照：多文化環境で学ぶ現代日本社会の諸相」との合同授業として実施されます。

外国文献研究分野

全学向けに E1 科目として開講される「外国文献研究（全・英）-E1」は、言語と結びついた文化や芸術、あるいは言語科学に関するテーマを取り上げて、これらの専門領域に関する知識や理解を深めると同時に、当該分野のテキストの読解をとおして、学術に資す

る英語力を強化することに重点を置きます。

このような本科目の性質上、授業では、担当教員による解説のみならず、受講生が積極的に参加する場も提供され、講義と演習を融合した形態がとられます。受講生が、＜ことば＞に関わる文化や科学の第一線の研究に触れ、実践的に関わることによって、英語という＜ことば＞に対する感覚を磨きつつ、教養を涵養することが、本科目の目的です。

外国文献研究分野では、この他に特定の学部に向けた科目が開講されます。